

# 「クールジャパン」のイメージを超えるサブカルチャー

取材・執筆／奥山晶子 撮影／名取和久

## 日本アニメにみられる 深い共感性

フランスは、世界各地から20万人を超える来場者がある日本サブカルチャーの祭典、「ジャパンエキスポ」の開催地だ。このことから、フランスでは日本のサブカルチャーブームが沸騰しているという認識をもつ人も多いだろう。では、フランスで初めてヒットした日本アニメは？

「その答えは、1978年に国営第二チャンネルで始まった『UFOロボ グレンダイザー』です」とブルネ氏。日本ではやや認知度が低いアニメながら、フランスではSFブームの波にも乗り100%に近い視聴率すら叩きだしたことがあるという。

撃は、氏の著書『水曜日のアニメが待ち遠しい』に詳しい。70年代後半、全国放送のテレビチャンネルが国営第一・第二の2つしかないフランスでは、熾烈な視聴率争いがあった。『グレンダイザー』の成功以降、日本アニメは子どもに受けると判断した両局は、『宇宙海賊キャプテンハーロック』『科学忍者隊ガッチャマン』など日本アニメを次々と放送し、ヒットを飛ばしたという。

技がフランス固有の名称に翻訳されるなど、違和感なく受け入れられるような工夫があったためだ。ブルネ氏は著書でそれを、つくり手たちは何ら意識していないながら、子どもたちにとっては「刷り込み」だったと表現している。「この時期の子ども向け番組でのアニメの紹介が、現在にまで至る、フランスにおける日本のサブカルチャー需要のビッグバンだったことは間違いありません。実際、この時期に一種の刷り込みを受けたことで、それ以降、何の抵抗感もなく日本のサブカルチャーを楽しめた僕らの世代は、フランスにお

「クールジャパン」の代名詞のように扱われる日本のアニメやマンガの世界。海外でも人気は高いが、実際にどのように彼らが受け止めているのかを日本人が知る機会意外と少ない。自ら「オタク」と公言し、日本史学研究者や翻訳家という顔ももつトリスタン・ブルネ氏に、母国フランスでの日本アニメ・マンガブームを軸とした日仏両国の社会情勢や精神性など幅広い独自の視点で、日本のサブカルチャーの過去・現在・未来について語っていただく。

けるオタクの第一世代と呼び得る存在となっていたのです」  
日本のアニメは、「日本性」を強く意識させない形でフランスに登場したのだ。それにしても、アニメの制作国は日本のほかにもたくさんあったはずだが、そのなかで特に日本アニメがヒットしたのはなぜなのか。ブルネ氏は著書で、日本アニメが他国のものに比べて安く輸入しやすかったことも要因のひとつと指摘している。しかし、もちろんそれだけが理由ではない。氏は語る。  
「日本アニメの魅力は、なんといっても深い共感性にあります。正義と悪の戦いを描くロボットヒーローものであっても、悪役は単に憎むべき対象ではなく、心をもった人物として登場します。時には悪役側に、自分の理想を求めて戦うといった共感可能な心理が潜



「UFOロボ グレンダイザー」  
永井豪原作のマンガおよびアニメ作品  
（日本では、1975年10月5日、  
1977年2月27日の毎週日曜日に放送）。  
フランスでは、ロボットアニメとして、  
初めて放送されたもので、子どもたちに大人気となった。

ブルネ氏も度々訪れている  
オタクの聖地  
「まんだらけ」中野店にて。  
お気に入りにはビンテージマンガや  
関連雑誌が並ぶニア館。

トリスタン・ブルネ／1976年フランス生まれ。ジュネーヴ大学大学院博士後期課程在籍。日本史学研究者・翻訳家。オタク。日本のアニメ、マンガなどに造詣が深く、フランス語版『北斗の拳』など複数のマンガ翻訳に携わる。2004年の初来日以降数度の留学を経て、現在は日本に在住。大学や語学学校でフランス語、フランス思想の講師をつとめる。

トリスタン・ブルネ

Tristan Brunet

んでいることすらあるのです。日本アニメが丁寧に描き込んだ登場人物の精神的背景は、フランスの子ども向けアニメでは見ることのできないものでした。私たちは、そこに夢中になりました。

フランスの個人主義的な世界観は自由や権利を重視しますが、時にそれは自分たちの自由を阻むものを否応なしに敵とみなす矛盾をはらんでいます。一方、敵味方関係なく共感性を大事にする日本アニメから、私たちは世界の多面性を教えられました。それとは自覚しないまま違う価値観を得、自分たちの価値観を再考するようなこの体験は、まさに奇跡といえるでしょう」

## アニメが象徴する 世界共通の感情

さらに、ブルネ氏は日本アニメにみられる「喪失感」にも注目する。著書にはこうある。

「『グレンダイザー』では、戦いによって人が死ぬということの現実がきちんと表現されていました。死んだのは敵だが、その死によって失われる何かがある、敵の人生にさえも価値があるというメッセージがあったのです。それは現実の戦争では誰しもが感じることでしよう。しかしそれを表現するとは、当時のアメリカやフランスでは、子どもにとって影響が強すぎるという

ただ、ブルネ氏はこのブームに違和感を覚えるという。「日本の作品」というパッケージ性が、純粹な共感や共鳴を邪魔するものとして作用し、今や広く消費されるためだけのものとなってしまったのではないかと警鐘を鳴らす。

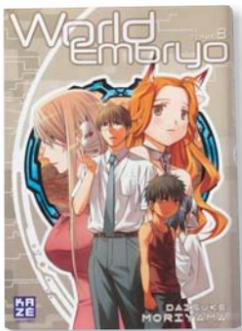
「日本のアニメやマンガに共感して交流を始めた私たちの世代と違い、今圧倒的多数を占めているのは『クールな日本のサブカルチャーを消費する人々』です。私は、『クールジャパン』という呼び名と戦略性が、逆に純粹なファンを遠ざけてしまうのではないかとこの危惧をもっています。それは作品にも垣間見られることです。登場人物たちへの共感や、喪失感といった面は薄れ、明るさやひたむきさに焦点を当てるようになったと感じるからです。

現在の作品群のなかでも、琴線に触れるものももちろんあります。学園SFアクションマンガの『ワールドエンブリオ』は、共感を丁寧に描いている作品だと感じて大好きになり、私自身がフランス語への翻訳を手掛けるほどのめり込みました。日本作品の素晴らしさは変わっていません。ただ、ブームを持続させるためには、『クールジャパン』というパッケージを飛び越えてヒットする作品の登場がなければなりません。『クールジャパン』という言葉のパッケージ性は強烈で、そのイメージを乗

理由で避けられていたことでした。ところが日本のアニメは、こうした事実や感情に共感できる存在として、子どもを認めたと言えるのです。

フランスの大人たちが子どもたちに見せまいとしていたネガティブで複雑な感情を、子どもたちの心はちゃんと捉えていたのです。言語化できないモ

ブルネ氏が  
フランス語に翻訳した  
『ワールドエンブリオ』。  
作者は森山大輔。



『ヤングキングアワーズ』  
少年画報社にて、  
2005年6月号、  
2014年7月号に  
連載された。

ような流れが生まれました。幼児向けは単純明快で面白く、大人向けは芸術作品として素晴らしいものになりましたが、その結果ティーンエイジャーを置き去りにしてしまいました。多感な少年少女が、日本のアニメに惹きこまれたのは当然でしょう」

ブルネ氏は、フランス以外の国にお

巨大ロボット作品のなかでも  
特に憧れた『機動戦士Ζガンダム』。  
アニメ監督の富野由悠季による小説本は  
今でも大切にしている。



人気テレビアニメ  
『機動戦士Ζガンダム』の編纂  
日本では1985年3月2日、  
1986年2月22日の  
毎週土曜日に放送された。

ヤマヤしたメランコリーを抱えながら生きる子どもたちに、日本のアニメはピタリとはまった。それは心の隙間を埋めるような行為だったのだと、今では思っています。

また、戦後まもなく、フランスではマンガを幼児向けと大人向けに分け、大人向けのマンガを芸術にまで昇華し

り越えるのは容易ではない。しかしブルネ氏は、世界を席巻する作品が生まれる可能性は常にあるという。そのうえで、どんな作品が必要とされているかを教えてくれた。

「日本文化のひとつとしてのサブカルチャーを提供するのではなく、世界が共有するひとつの時代性を理解し、かつそれを反映させるといふ考え方が必

## 自国を離れた 視点をもつべき

もうひとつ、作られた日本のイメージを乗り越えるという視点で考えれば、まだパッケージ性を感じさせないジャンルに可能性を見いだせるといえる。ブルネ氏はその可能性を、ボードゲー

日本のサブカルチャーを  
「社会性と個人性の  
間にある微妙な揺れ  
と創造力」という  
独自の視点で捉えた  
自著『水曜日の  
アニメが待ち遠しい』。



Tristan Brunet

要ではないかと強く感じています。私  
が実際に体験したフランスでの熱狂は、  
まさに言語化できない感情の共鳴に端  
を發していたからです。それは、あの  
時代にしかありえない精神性と作品の、  
奇跡のような共鳴でした。今の世代も、  
そのような経験をする可能性は十分に  
あります」

ムに見ている。ボードゲーム愛好者の  
数はほかのジャンルから見ればかなり  
少ないが、日本の作品は評判がとても  
高い。つくり手と遊び手との距離感が  
近いのが特徴的で、現代の時代性に沿  
う新たな可能性を感じさせるといふ。  
また、日本においては発見できないブ  
ームの芽もある。

戦から、いわば完全民主化に至るまで  
に各国が経験したメランコリーが、時  
代性をもった世界共通の感情として日  
本アニメに象徴されたのではないかと  
考えています」

フランスでは、70年代後半からの口  
ポットアニメブームを経て、80年代後  
半には「めぞん一刻」「きまぐれオレ  
ンジ☆ロード」「キャプテン翼」とい  
った、日本の若者の日常を描くアニメ  
が放送されるようになる。その頃には  
まぎれもなく「日本のアニメ」として  
見られるようになるが、その世界観や  
価値観を、フランスの子どもたちはす  
でに親しみをもって受け入れるようにな  
っていた。そしてフランス人は、日  
本アニメにますます熱中していくこと  
になる。

## 時代性を 丁寧に描けばヒットの 可能性は高い

フランスでは、1980年代から90  
年代にかけて起こったジャパンバッシ  
ングのなかで、日本のアニメもやり玉  
にあげられた。しかしそれは皮肉なこ  
とに、若者たちが貪欲に日本のアニメ、  
マンガ、ゲームへのめり込んでいく  
契機となり、2000年に「ジャパン  
エキスポ」が開催されると、日本のサ  
ブカルチャー人気は不動のものになっ  
てゆく。

「たとえば、フランスをはじめとした  
外国に人気の『DARK SOULS』とい  
う日本発のビデオゲームがありますが、  
日本では存在感が薄いようです。もち  
ろん、そういったことは新しい現象で  
はありません。しかし違和感を覚える  
のは、日本が『クールジャパン』を意  
識すればするほど、外国人の興味から  
はどんどん離れていくということです。  
日本性を売ろうとするほどに、日本の  
アニメは広く文化を愛する人のための  
ものではなく、日本ファンだけのもの  
になってしまいます。それは大変な矛  
盾です。まずは、日本のアニメがなぜ  
これほどまでに受け入れられたかを、  
きちんと自覚することが必要ではない  
でしょうか」

ブルネ氏自身、自国での日本サブカ  
ルチャーブームについてこのように考  
察することができたのは、日本を訪れ  
るようになってからのことだといふ。  
日本とフランスの往復を繰り返して、  
「共感」の裏にあるものが少しずつ見  
えるようになった。「フランスを出な  
ければ、曖昧に感じていたことを言語  
化することはできなかったでしょう」  
という氏の言葉に、一番のヒントがあ  
るのではないだろうか。ブルネ氏は、  
他国の文化を吸収したうえで遠くから  
自国を見つめ、深く考えることで自ら  
「新しい視点」を獲得した。同じことが、  
今の日本人に求められているといつて  
も過言ではない。